

書評

加藤 敏 監修, 阿部隆明, 小林聡幸, 塩田勝利 編集

症例に学ぶ精神科診断・治療・対応

小林隆児

精神疾患の国際診断基準が本格的にわが国に導入されてから、すでに 35 年が経過した。今や心情的に古典的分類を手放せないでいる臨床医はごく少数派となっているのではないか。論文はもちろんのこと、教科書であれ公的文書であれ、それが標準仕様となった。しかし、行動科学に裏打ちされた国際診断基準は、症状をみてもところをみない臨床医を確実に増やしている。自然科学に倣った「科学的エヴィデンス」を武器に脳科学の進歩は目覚ましく、薬物療法の隆盛をもたらし、その一方で精神療法の存在は影が薄い。

本書は編者らの「精神疾患に対する繊細な病態理解が浅薄になった現状を憂い、患者の置かれた社会的文脈やパーソナリティなどに十分注意を払った繊細な病態理解、それに基づいたしなやかな治療」が今だからこそ求められているという強い思いによって生まれたものである。

本書は、この数十年間自治医科大学精神医学教室を主宰してきた加藤敏氏の指導のもとに教室員が発表してきた多数の症例報告を厳選し、若干の序説的・総論的論文とともにジャンルごとにまとめたもので、文字通り「症例から学ぶ」教科書である。神経症圏、気分障害、統合失調症、器質性・症状性精神障害など、古典的分類に慣れ親しんできた評者にはうれしいジャンル分けがなされ、55 本もの症例報告を中心とした論文で構成されている。編者の意図が大いに発揮されているのは、神経症圏、気分障害、統合失調症は言うに及ばず、器質性・症状性精神障害やリエゾン精神医学の領域ではないか。深い力動的理解があって初めて器質的疾患が発見されることも珍しくないからである。「パニック障害との鑑別が問題となった脳脊髄液減少症」、「心因性の昏迷との鑑別に苦慮した神経梅毒」などを読むとその感を強くする。

本書に目を通す中で加藤敏氏と同時代に生きてき

た評者も教室で学んだことが想起された。毎週金曜日夕方から開催されていた教室の勉強会で故藤縄昭氏(当時東京都精神医学研究所所長)の講演を聞く機会があった。氏は穏やかな口調の中で「精神医学の学びは、症例報告にはじまり症例報告におわる」と最後に力説していたのを鮮明に記憶している。その影響もあって評者は今日まで症例報告をまとめることを臨床の腕を磨く上でことのほか大切にしてきたが、本書で取り上げられている膨大な症例報告を目にして、加藤氏が主任教授として教室員を指導する際に何を大切にしてきたのか、その思いの一端に触れたような気がするのである。

最後に一言。編者が序文で「すべてが症例記述の教科書というのは無理があることは分かっている。症例とは個別的なものであり、教科書的な記載とは普遍を目指さねばならないからである。それでも副読本になら…症例による実践的な教科書があってもいいのではないか」と述べていることについて。冒頭に取り上げた精神療法が今日のエヴィデンス主義の中でその存在が貶められていると思われるからである。人が人を相手に実践する営みである精神療法が研究として成り立つためには自然科学に基づくエヴィデンス主義に倣ってはいつまでも後塵を拝することになりはしないか。精神療法の症例報告であっても、その中に人間の心理を理解する上でのなんらかの本質が見出せるならば、それはけっして単なる個別的なものでは終わらない。人間の心の理解を目指す臨床精神医学とはそのような性質の営みであると思われるからである。その意味からも本書は永く読み継がれてほしい教科書である。

(西南学院大学人間科学部社会福祉学科)

●B5 480 頁 2015 定価: 9,000 円+税 金原出版刊